

- For more records, click the Records link at page end.
- To change the format of selected records, select format and click Display Selected.
- To print/save clean copies of selected records from browser click Print/Save Selected.
- To have records sent as hardcopy or via email, click Send Results.

☒ Select All  
☒ Clear Selections

☐ Print/Save Selected

☐ Send Results

Format  
☒ Display Selected Free

1. ☐ 1/5/1 DIALOG(R)File 352:Derwent WPI (c) 2006 The Thomson Corporation. All rts. reserv.

0003465966

WPI Acc no: 1985-239898/

XRAM Acc no: C1985-103979

Cholesterol increment-inhibitor - contains catechin deriv.

Patent Assignee: MITSUI NORIN KK (MITS-N)

Inventor: HARA M; OOYA M

Patent Family (2 patents, 1 countries)

Patent Number	Kind	Date	Application Number	Kind	Date	Update	Type
JP 60156614	A	19850816	JP 198410980	A	19840126	198539	B
JP 1990044449	B	19901004	JP 198410980	A	19840126	199044	E

Priority Applications (no., kind, date): JP 198410980 A 19840126

Patent Details

Patent Number	Kind	Lan	Pgs	Draw	Filing Notes
JP 60156614	A	JA	6	0	

Alerting Abstract JP A

The inhibitor contains a tea-catechin deriv. of formula (I) where R1 is H or OH; R2 is H or (II).

USE - (I) are known, are typically included (-) epicatechin, (-) epigallocatechin, (-) epicatechin gallate, and (-) epigallocatechin gallage.

Title Terms/Index Terms/Additional Words: CHOLESTEROL; INCREMENT ; INHIBIT; CONTAIN; CATECHIN; DERIVATIVE

Class Codes

International Patent Classification

IPC	Class Level	Scope	Position	Status	Version Date
A61K-031/35; A61K-035/78; C07D-311/62			Secondary		"Version 7"

File Segment: CPI

DWPI Class: B02

Manual Codes (CPI/A-N): B06-A01; B12-H03

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭60-156614

⑬ Int. Cl.<sup>4</sup>  
A 61 K 31/35  
// C 07 D 311/62

識別記号  
ADN

庁内整理番号  
7330-4C  
6640-4C

⑭ 公開 昭和60年(1985)8月16日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

⑮ 発明の名称 コレステロール上昇抑制剤

⑯ 特 願 昭59-10980

⑰ 出 願 昭59(1984)1月26日

⑱ 発 明 者 原 征 彦 静岡市駒形通5-11-8  
⑲ 発 明 者 大 矢 真 弓 静岡市遠藤新田392-10  
⑳ 出 願 人 三井農林株式会社 東京都中央区日本橋室町2丁目1番地1  
㉑ 代 理 人 弁理士 久保田 藤郎

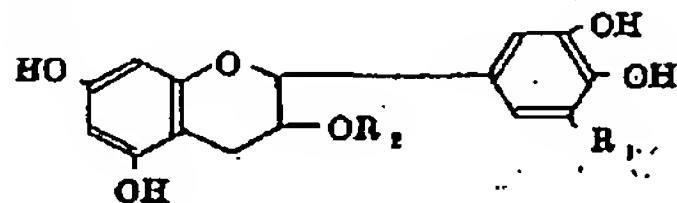
## 明 細 書

## 1. 発明の名称

コレステロール上昇抑制剤

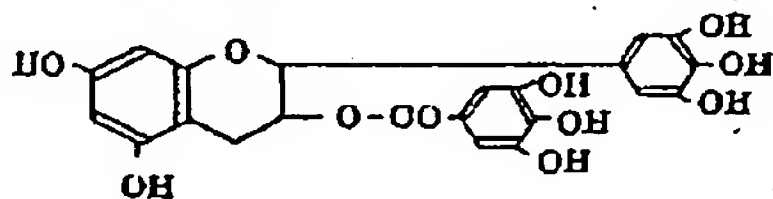
## 2. 特許請求の範囲

## 1. 一般式



(式中、R<sub>1</sub>はHあるいはOHを、R<sub>2</sub>はHあるいは  
-OO-を示す。)で表わされる茶カテキン  
類を有効成分とするコレステロール上昇抑制剤。

## 2. 茶カテキン類が式



で表わされる(-)エピガロカテキンガレートである  
特許請求の範囲第1項記載のコレステロール上昇  
抑制剤。

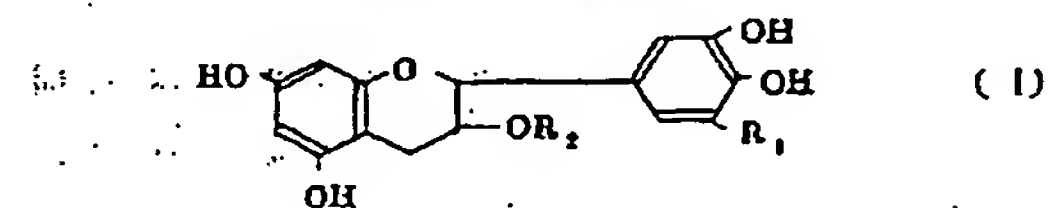
## 3. 発明の詳細な説明

本発明はコレステロール上昇抑制剤に関する。  
血中および肝臓中における脂質、特に血中コレ  
ステロールの増加による血管老化に伴なつて惹起  
される各種心臓疾患、脳疾患等は近年重大関心事  
となつており、これらの発症を予防する薬剤の出  
現が求められている。

本発明者らは茶カテキン類を製造する方法に関  
し、既に茶葉中より効率よく茶カテキン類を採取  
することに成功し、併せてその生理活性について  
も研究を進め、いくつかの知見を得た。たとえば  
ラードに対する抗酸化性、天然着色料に対する退  
色防止効果、天然精油の劣化防止効果、魚類腐敗  
臭の抑臭効果、細菌類に対する抗菌効果等である。

その後、さらに研究を続けた結果、茶カテキン  
類がすぐれたコレステロール上昇抑制作用を有す  
ることを見出し、本発明を完成するに至つた。

すなわち本発明は一般式



特開昭60-156614(2)

(式中、 $R_1$ はHあるいはOHを、 $R_2$ はHあるいは  
 $-\text{CO}-\text{C}_6\text{H}_3(\text{OH})_3$ を示す。)で表わされる茶カテキン  
 類を有効成分とするコレステロール上昇抑制剤で  
 ある。

茶カテキン類とは、一般に茶タンニンと呼ばれ  
 ているものの主成分であり、生茶葉あるいは煎茶  
 乾物中に10～25%程度含まれ、茶の渋味乃至  
 滋味を形成する成分である。なお、紅茶の場合は  
 これらカテキン類が酸化重合した形で存在してい  
 る。

茶カテキン類は、本発明者らの開発した方法(特  
 開昭58-94069号、同58-120963号)によつ  
 て製造することができ、通常次の4種類に分離さ  
 れる。

(一)エピカテキン(式中、 $R_1=H$ 、 $R_2=H$ )(以  
 下、EOと略す。)

(二)エピガロカテキン(式中、 $R_1=OH$ 、 $R_2=H$ )  
 (以下、EGOと略す。)

(三)エピカテキンガレート(式中、 $R_1=H$ 、 $R_2=-\text{CO}-$   
 $\text{C}_6\text{H}_3(\text{OH})_3$ )(以下、EO<sub>g</sub>と略す。)

15.0%、コレステロールを1.0%添加した対象  
 群を第1群とし、これに対し、1.0%および2.0  
 %粗カテキンを添加した群を夫々第2群、第3群  
 とする。飼料組成は第1表に示したとおりである。

飼育は、室温 $24 \pm 1^\circ\text{C}$ 、相対湿度45～55  
 %、6時より18時まで照明、18時より6時ま  
 で消燈の空調動物室で一匹ずつステンレス製懸垂  
 飼育籠に入れ、飼料と水は自由に摂取させて4週  
 間飼育し、その間の成長、飼料摂取量を調べた。  
 飼料は粉末であり、目皿を有する肉厚ガラス製カ  
 ヅラに入れて与えた。

4週間飼育後、12時間断食にし、あらかじめ  
 ベバリン(1000単位/ml)溶液を添加した注射  
 筒を用いて心臓より採血し、遠心分離(3000rpm  
 $\times 20\text{min}$ )してプラズマを得た。各臓器は重さ  
 を測定し、肝臓は凍結乾燥後粉末化して実験に供  
 した。

プラズマ中の成分のうちヘマトクリットは毛細  
 管によるマイクロヘマトクリット法、ヘモグロビン  
 はシアンメトヘモグロビン法、グルコースは酵素

(四)エピガロカテキンガレート(式中、 $R_1=OH$ 、  
 $R_2=-\text{CO}-\text{C}_6\text{H}_3(\text{OH})_3$ )(以下、EGO<sub>g</sub>と略す。)

これら茶カテキン類のうちでは、EGO<sub>g</sub>がほぼ半量  
 を占める。これら茶カテキン類は水溶性であるが、  
 予め少量のエタノールに溶解させることによつて  
 容易に油脂等と混合させることができる。

茶カテキン類が血中コレステロールの上昇を抑  
 制するばかりでなく、肝臓中脂質(特にコレステ  
 ロール)の蓄積を抑制する強い効果を有している  
 ことを以下の実験によつて確認した。なお、以下  
 において粗カテキンとは上記4種類の茶カテキン  
 類の混合物を意味する。

#### 実験例1

1群6匹のwistar系雄雌乳ラット(3週令体重  
 約40g)3群を用い、25%カゼインを含む基  
 本飼料を与え3～4日間飼育し、体重55～60  
 gに達したものを1匹ずつステンレス製懸垂飼育  
 籠に移して実験に供した。

実験群は強制的に血中コレステロールを増加さ  
 せる為に、シユークロースおよびラードを各々

法によつて定量した。総コレステロール量は Zak-  
 Henry 変法により、トリグリセライドおよび Free-  
 HDL-、LDL-コレステロールは酵素法により定量  
 した。

肝臓中脂質は Folch 法により抽出し、肝臓中コ  
 レステロールおよびトリグリセライドはプラズマ  
 と同様にして定量した。

第1表 飼料組成

成 分	組 成 (%)		
	第1群	第2群	第3群
カゼイン	25.0	25.0	25.0
$\alpha$ -デンプン	35.84	34.9	33.9
シユークロース	15.0	15.0	15.0
ラード	15.0	15.0	15.0
コーン油	2.0	2.0	2.0
塩混合	5.0	5.0	5.0
ビタミン混合	1.0	1.0	1.0
塩化コリン	0.1	0.1	0.1
コレステロール	1.0	1.0	1.0
カフェイン	0.06	—	—
粗カテキン	—	1.0	2.0

4週間を通じて各群とも飼料摂取、成長共に正常であつた。プラズマ中成分の測定結果を第2表に、肝臓中成分の測定結果を第3表に示す。

第2表

	第1群	第2群	第3群
ヘマトクリット(%)	44.0±1.0	45.0±0.8	45.4±0.5
グルコース(mg/dl)	155.8±9.9	174.0±10.6	145.2±4.1
総コレステロール(mg/dl)	141.7±6.5 <sup>a)</sup>	111.7±3.5 <sup>b)</sup>	109.9±6.0 <sup>b)</sup>
Free-コレステロール(mg/dl)	26.15±2.51 <sup>a)</sup>	20.82±1.38 <sup>a)</sup>	21.48±1.78 <sup>a)</sup>
総コレステロール- Free-コレステロール(mg/dl)	115.5±7.8 <sup>a)</sup>	90.87±4.06 <sup>b)</sup>	88.42±4.84 <sup>b)</sup>
HDL-コレステロール(mg/dl)	46.83±7.72 <sup>a)</sup>	47.06±1.24 <sup>a)</sup>	49.02±4.58 <sup>a)</sup>
LDL-コレステロール(mg/dl)	78.50±4.85 <sup>a)</sup>	54.76±3.21 <sup>b)</sup>	50.89±3.19 <sup>b)</sup>

a), b) は  $p=0.05$  における有意差表示

肝臓中の総脂質の割合は、解剖時重量に換算して対象群が22.5%と非常に高いのに対し、粗カテキン添加によつて14.9%, 10.4%と顕著に低くなっている。トリグリセライド、コレステロール量においても粗カテキン添加によつて対象群に比べて著しく低下した。

## 実験例2

1群6匹のWistar系雄乳ラット(3週令体重約40g)4群を用い、実験例1と同様な条件下で4週間飼育し、実験に供した。

実験群は25%カゼインを含む基本飼料を与える基本食群を第1群とし、強制的に血中コレステロールを増加させる為にシユーグロースおよびラードを各々15.0%, コレステロール1.0%、さらにNaコレート0.2%添加した対象群を第2群とする。対象群に対し、BOGを0.5%および1.0%添加した群を第3群、第4群とする。飼料組成は第4表に示す。

第3表

	第1群	第2群	第3群
総脂質(%)	22.50±1.16 <sup>a)</sup>	14.94±0.62 <sup>b)</sup>	10.38±0.21 <sup>c)</sup>
総トリグリセライド(mg)	764±54 <sup>a)</sup>	562±33 <sup>b)</sup>	266±20 <sup>c)</sup>
トリグリセライド(mg/100g)	77.6±4.6 <sup>a)</sup>	59.8±3.8 <sup>b)</sup>	33.3±1.3 <sup>c)</sup>
総コレステロール(mg)	283±19 <sup>a)</sup>	213±17 <sup>b)</sup>	149±21 <sup>c)</sup>
コレステロール(mg/100g)	28.6±1.1 <sup>a)</sup>	22.6±1.7 <sup>b)</sup>	18.4±1.9 <sup>b)</sup>

a), b), c) は  $p=0.05$  における有意差表示

プラズマにおいて、ヘマトクリット、グルコース値は3群とも正常値を示した。総コレステロール量は、対象群に対して粗カテキンを1.0%, 2.0%添加することによつてコレステロール上昇が抑制されていることがわかる。また、コレステロールの存在形態においては、Free-およびHDL-コレステロール量に差はなく、体内へのコレステロール蓄積に最も関与していると思われるLDL-コレステロール量が対象群では多いが、粗カテキン添加によつて著しく抑制されている。

第4表飼料組成

成分	第1群	第2群	第3群	第4群
カゼイン	25.0	25.0	25.0	25.0
$\alpha$ -デンプン	63.9	35.7	35.2	34.7
シユーグロース	—	15.0	15.0	15.0
ラード	—	15.0	15.0	15.0
コーン油	5.0	2.0	2.0	2.0
塩混合	5.0	5.0	5.0	5.0
ビタミン混合	1.0	1.0	1.0	1.0
塩化コリン	0.1	0.1	0.1	0.1
コレステロール	—	1.0	1.0	1.0
Naコレート	—	0.2	0.2	0.2
粗カテキン	—	—	—	—
BOG	—	—	0.5	1.0

4週間を通じて各群とも飼料摂取、成長共に正常であつた。プラズマ中成分の測定結果を第5表に、肝臓中成分の測定結果を第6表に示す。

第5表

	第1群	第2群	第3群	第4群
ヘマトクリット(%)	46.5±1.6	44.6±1.0	43.9±0.8	42.7±0.6
ヘモグロビン(g/dl)	14.55±0.19 <sup>a)</sup>	13.23±0.10 <sup>a)</sup>	13.47±0.14 <sup>a)</sup>	13.24±0.18 <sup>a)</sup>
グルコース(mg/dl)	175.6±3.6 <sup>a)</sup>	178.5±7.3 <sup>a)</sup>	182.7±7.3 <sup>a)</sup>	185.6±5.3 <sup>a)</sup>
総コレステロール(mg/dl)	933.8±4.89 <sup>a)</sup>	223.7±1.43 <sup>b)</sup>	142.8±4.8 <sup>c)</sup>	114.2±8.6 <sup>a)</sup>
Free-コレステロール(mg/dl)	26.69±1.29	39.67±1.72	28.23±1.47	22.57±1.29
総コレステロール- Free-コレステロール (mg/dl)	665.8±3.73	184.0±1.32	114.6±4.2	91.75±7.50
HDL-コレステロール (mg/dl)	534.6±2.94 <sup>a)</sup>	215.6±1.45 <sup>b)</sup>	310.6±1.45 <sup>c)</sup>	29.70±1.07 <sup>c)</sup>
LDL-コレステロール (mg/dl)	11.30±0.81 <sup>a)</sup>	16.38±1.05 <sup>b)</sup>	85.27±4.60 <sup>c)</sup>	53.94±4.83 <sup>d)</sup>
トリグリセリド(mg/dl)	1.627±7.1 <sup>a)</sup>	92.08±8.01 <sup>b)</sup>	74.12±6.05 <sup>b)</sup>	71.89±8.87 <sup>b)</sup>

a), b), c), d) は  $p=0.05$  における有意差表示

第6表

	第1群	第2群	第3群	第4群
総脂質(%)	52.0±0.13 <sup>a)</sup>	32.95±0.69 <sup>b)</sup>	28.73±0.81 <sup>c)</sup>	23.99±0.57 <sup>d)</sup>
総トリグリセリド(mg)	8.80±6.4 <sup>a)</sup>	19.29±4.9 <sup>b)</sup>	16.4±8.8 <sup>c)</sup>	10.46±7.7 <sup>d)</sup>
トリグリセリド(mg/肝臓)	1.17±0.6 <sup>a)</sup>	1.61±.3 <sup>b)</sup>	1.28±.3 <sup>c)</sup>	9.84±6.6 <sup>d)</sup>
総コレステロール(mg)	36.2±1.5 <sup>a)</sup>	13.18±8.1 <sup>b)</sup>	10.72±3.0 <sup>c)</sup>	8.15 <sup>c)</sup>
コレステロール (mg/肝臓)	4.83±0.11 <sup>a)</sup>	10.6±.3 <sup>b)</sup>	8.43±2.2 <sup>c)</sup>	7.14 <sup>c)</sup>

a), b), c), d) は  $p=0.05$  における有意差表示

プラズマにおいて、ヘマトクリット、ヘモグロビンおよびグルコースは各群とも正常値を示した。総コレステロール量は、基本食群が93.3mg/dlであったのに対し、対象群は22.4mg/dlと増大しているが、0.5%、1.0% EGOg添加によつて14.3mg/dl、11.4mg/dlとコレステロールの増加を抑制した。特に1.0% EGOgを添加した第4群は基本食群と有為な差はなく、強制的にコレステロール値を上昇させる食餌の影響を完全に抑制した。コレステロールの存在形態も、基本食群に対し対象群はHDL-コレステロールが少なく、LDL-コレステロールが多いが、これに対し第3群、第4群ではHDL-コレステロールが多くなりLDL-コレステロールが少なくなつた。

肝臓中の総脂質の割合は、解剖時重量に換算して基本群5.2%に対し対象群は33.0%と極めて増大したが、0.5%、1.0% EGOg添加によつて28.7%、24.0%と著しく減少した。トリグリセリド、コレステロール肝臓においても、EGOg添加によつて対象群に比べて増加を抑制した。

尚、実験例1、2を通じて第4週目の肝中脂質量をFolch法により測定したところ、いずれも対象群に比べ粗カチキンあるいはEGOg添加群の方が大きな値を示した。

## 実験例3

1群6匹のWistar系雄乳ラット(3週令体重約40g)2群を用い、実験例1と同様な条件下で4週間飼育し、実験に供した。

実験例1、2を通じて血中および肝臓中の脂質、特にコレステロールを強制的に増加させる飼料を与えても、粗カチキン、EGOgの添加によつてその増加を抑制することがわかつた。しかし、コレステロールは細胞膜構成成分、各種ホルモン前駆物質として重要であり、正常値に保つ必要がある。そこで、今回の実験ではEGOgはコレステロール強制添加食に添加した時にはコレステロール値を下げるが、基本食に添加した時には影響しないことを確かめる。

従つて、実験群は25%カゼインを含む基本飼料を与える基本食群を第1群とし、これに対して

1.0 % BGCg添加した群を第2群とする。飼料組成は第7表に示す。

成 分	組 成 (%)	
	第1群	第2群
カゼイン	25.0	25.0
$\alpha$ -デンプン	63.9	62.9
コーン油	5.0	5.0
塩混合	5.0	5.0
ビタミン混合	1.0	1.0
塩化コリン	0.1	0.1
BGCg	—	1.0

2週間を通じて2群とも飼料摂取、成長共に正常であつた。プラズマ中成分の測定結果を第8表に、肝臓中成分の測定結果を第9表に示す。



プラズマにおいて、ヘマトクリット、ヘモグロビンおよびグルコースは2群とも正常値を示した。総コレステロール量も基本食群が95 mg/dl、第2群が103 mg/dlと有為な差は見られず、その他の成分でも差は見られなかつた。

肝臓中の総脂質の割合は、解剖時重量に換算して基本食群(第1群)5.4%に対し、第2群も4.6%と有為な差はなく、コレステロール、トリグリセライドにおいても差はなかつた。

以上の実験例1, 2および3によつて、茶カテキン類(特にBGCg)はラットに脂質、特にコレステロールを強制的に増加させる飼料を与えた時、血中および肝臓中の脂質、特にコレステロールの増加を顕著に抑制することがわかつた。さらに、基本食を与えた時には、血中および肝臓中の体成分として重要なコレステロールに影響を与えないことも明らかとなつた。

急性毒性試験の結果を以下に示す。

ICR系マウス雄6週令にBGCgを経口投与した場合、1週間後のLD<sub>50</sub>は2314 mg/kgであつた。さら

第8表

	第1群	第2群
ヘマトクリット(%)	45.2±0.7 <sup>a)</sup>	44.4±0.5 <sup>a)</sup>
ヘモグロビン(g/dl)	140.7±0.12 <sup>a)</sup>	138.3±0.28 <sup>a)</sup>
グルコース(mg/dl)	166±5 <sup>a)</sup>	170±1 <sup>a)</sup>
総コレステロール(mg/dl)	95.1±4.1 <sup>a)</sup>	103.5±5.3 <sup>a)</sup>
Free-コレステロール(mg/dl)	30.2±1.7 <sup>a)</sup>	31.5±1.4 <sup>a)</sup>
総コレステロール-Free-コレステロール(mg/dl)	64.9±2.5 <sup>a)</sup>	72.0±4.2 <sup>a)</sup>
HDL-コレステロール(mg/dl)	55.6±2.9 <sup>a)</sup>	61.7±2.1 <sup>a)</sup>
LDL-コレステロール(mg/dl)	14.2±1.8 <sup>a)</sup>	17.2±1.4 <sup>a)</sup>
トリグリセライド(mg/dl)	164±2.2 <sup>a)</sup>	166±2.3 <sup>a)</sup>

a)はp=0.05における有意差表示

第9表

	第1群	第2群
総脂質(%)	5.35±0.19 <sup>a)</sup>	4.58±0.06 <sup>a)</sup>
総トリグリセライド(mg)	91.6±8.7 <sup>a)</sup>	73.7±4.0 <sup>a)</sup>
トリグリセライド(mg/脂質)	11.7±1.0 <sup>a)</sup>	16.9±0.6 <sup>a)</sup>
総コレステロール(mg)	35.4±1.4 <sup>a)</sup>	35.3±1.2 <sup>a)</sup>
コレステロール(mg/脂質)	4.55±0.15 <sup>a)</sup>	4.36±0.07 <sup>a)</sup>

a)はp=0.05における有意差表示

に、ICR系マウス雄5週令にBGCgを腹腔投与した場合、1週間後のLD<sub>50</sub>は150 mg/kgであつた。

本発明のコレステロール上昇抑制剤を人体に投与する場合は、通常1日量2~5g程度を経口的に服用することが好ましく、そのままあるいは適宜希釈剤を加えて増量し散剤として服用してもよい。さらに、錠剤またはカプセル剤としてもよい。即ち乳糖、ぶどう糖等の賦形剤；でんぷん糊液、CMC等の結合剤；でんぷん、結晶セルロース等の崩壊剤；ステアリン酸マグネシウム、タルク等の滑沢剤等を用いて錠剤またはカプセル剤を製造することができる。また、錠剤には必要に応じて包衣を施してもよい。

以下に製剤を実施例として示すが、製剤はこれのみに限定されるものではない。

#### 実施例 錠剤

粗カテキンまたはBGCg	100mg
軽質無水ケイ酸	80mg
結晶セルロース	140mg
乳糖	適量

ステアリン酸マグネシウム 2号  
上記組成比を常法に従い1錠に成型する

特許出願人 三井物産株式会社

代理人 弁護士 久保田 康 郎

